第1章　外国人児童生徒等の多様性への対応

文科省手引			手引き	質　問	キーワード
章	大項目	小項目	Q&A		
第1章　外国人児童生徒等の多様性への対応	2	(1)	1	全国における外国人児童生徒等教育の状況について教えてください。	全国の状況 集住化と散在化
			2	岐阜県における外国人児童生徒の在籍数と言語別の内訳について教えてください。	岐阜県の状況
	3	(1)	3	外国人児童生徒等の多様性への対応をするために、どのようなことに気を付ければよいでしょうか。	子どもを捉える視点 日本と外国の文化の違い
		(1) (2)		外国人児童生徒がもつ背景に対する学校で実際に行った支援について、具体的にどのようなケースがありますか。	
	4	(1) ~(5)	4	外国人児童が直面する課題と支援には、どのようなものがありますか。	外国人児童が直面する課題 ・言語習得　・自己肯定感
	5	(2)	5	散在地域において、急な編入、転入による外国人児童生徒を受け入れる際に、学校が直面する課題と支援にはどのようなものがありますか。	校内支援体制 日本語指導の体制 学級の受入れ体制
		(3)		取り出し指導を行うために必要な特別の教育課程とは何ですか。また、どのように編成すればよいですか。	特別の教育課程 ことばの力のものさし

第1章　外国人児童生徒等の多様性への対応

文科省手引 p.5 に該当

2　外国人児童生徒等の増加

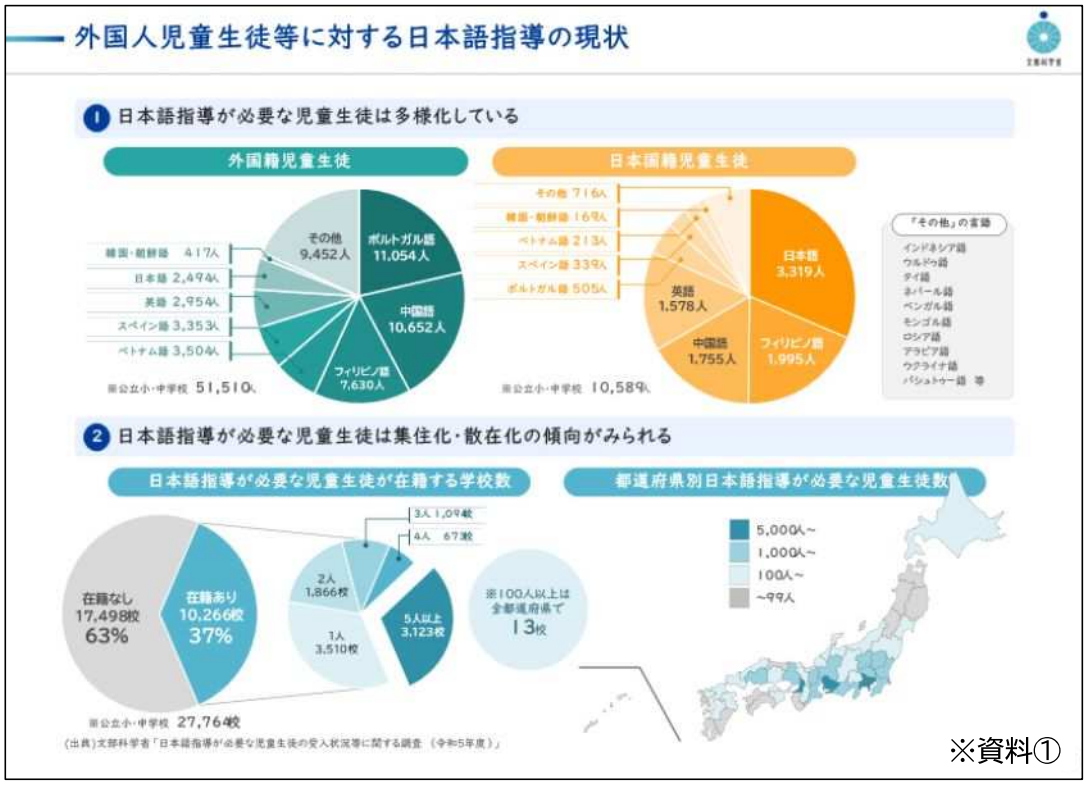
(1) 日本の学校に在籍する外国人児童生徒

Q1　全国における外国人児童生徒教育の状況について教えてください。

A1　全国的にも外国につながる児童生徒は多様化・増加傾向です。

全国において、外国につながる児童生徒は増加し続けており、国籍や使用している母語のみならず、育ってきた環境や文化・宗教など、様々なバックグラウンドをもった児童生徒が日本の学校に在籍しており、年々増加しています。

また、日本語指導が必要な児童生徒の数も増加しており、住んでいる場所も集住化・散在化の傾向が見られます。

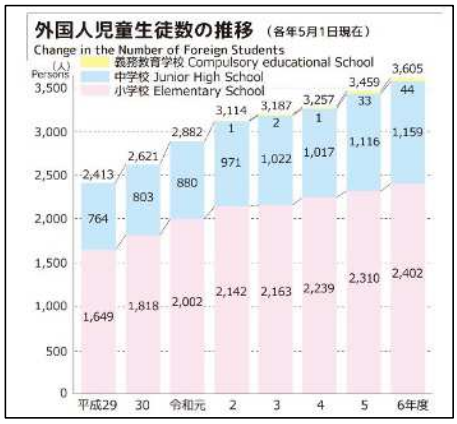


※資料①

全国

※資料②

岐阜県　　出典:岐阜県教育のすがた(2025)



※資料①・②:R7.4.25「外国人児童生徒等教育の充実に関する有識者会議(令和7年度)(第2回)【参考資料5】外国人児童生徒等の教育に関する現状と課題について」(文部科学省)(https://www.mext.go.jp/content/20250425-mxt_kyokoku-000041756_005.pdf)を加工して作成

外国人児童生徒等の多様性への対応

文科省手引 p.5 に該当

2 外国人児童生徒等の増加

(1) 日本の学校に在籍する外国人児童生徒

Q2 岐阜県における外国人児童生徒の在籍数と言語別の内訳について教えてください。

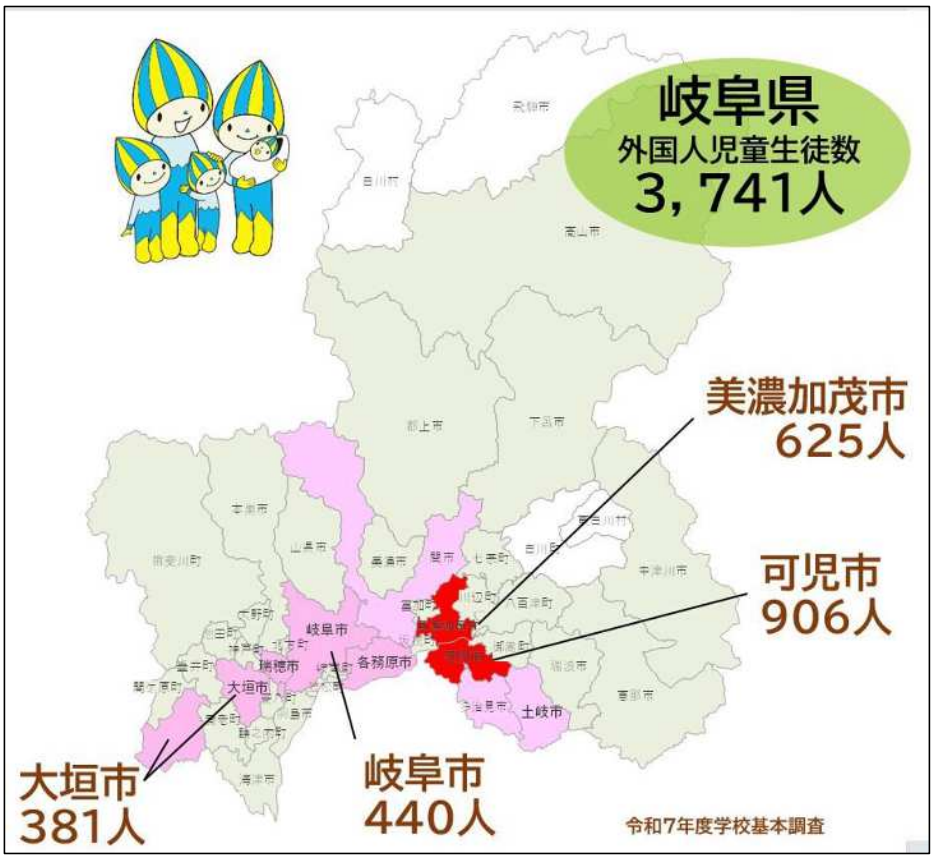
A2 集住化に加えて、散在化と多言語化が同時進行で進んでいます。

○岐阜県における外国人児童生徒数

岐阜県においては、42自治体のうち、38の自治体に 3,741 人の外国人児童生徒が在籍しています。

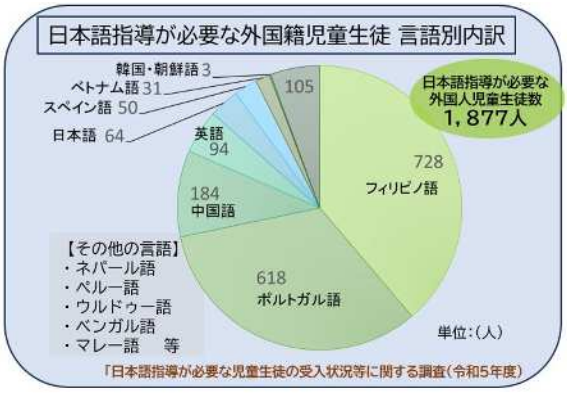
飛騨市、白川町、東白川村、白川村においては、外国人児童生徒の在籍はありません(令和7年度学校基本調査)が、外国人児童生徒は岐阜県各地に広く在籍しています。

中でも、可児市、美濃加茂市、岐阜市、大垣市、瑞穂市、各務原市、土岐市、関市においては、公立小・中学校に在籍する外国人児童生徒は100人を超えており、特に日本語指導が必要な児童生徒に対する、日本語指導をはじめとした様々な支援が求められています。



また、外国人児童生徒の在籍が少ない、いわゆる散在地域と呼ばれる自治体においては、生活習慣や文化が違う児童生徒や保護者に対する支援や接し方をはじめ、誰がどのように日本語指導を行えばよいかなど、十分なノウハウが蓄積されておらず、多くの課題を抱えています。

外国人児童生徒が日本の学校で安心して生活し、生きる力を育んでいけるように、どの自治体においても、外国人児童生徒の受入れについて、市町村教育委員会と連携して取り組むことが急務です。



外国人児童生徒等の多様性への対応

3 外国人児童生徒等の多様な背景

(1) 言語・文化の多様性

文科省手引 p.7 に該当

Q3 外国人児童生徒等の多様性への対応をするために、どのようなことに気を付ければよいでしょうか。

A3 多様な視点から子どもを捉えるようにしましょう。

○多様な言語的・文化的背景のある児童生徒の多様性を理解する

外国人児童生徒とその保護者には、その国籍や出身地により、多様な言語的・文化的背景があります。まずは、彼らのもつ言語的・文化的背景や来日した状況等を組織的に把握することに努めましょう。

国籍や社会背景も様々であり、また、母国の政治的・社会的背景や親の職業的事情等によって母国を離れることを余儀なくされた可能性もあります。また、在留資格によって日本での生活に様々な制約がある場合もあります。学校がこうした児童生徒の背景をできる限り捉え、校内での情報共有や家庭との連携を図ることで、一人一人の児童生徒の学校生活の充実や進路実現につなげたいものです。

○子どもを捉える視点の例

来日の経緯	家庭環境	言語・文化
来日の背景は様々です。中には、本人が納得しないまま家庭の事情で日本の学校に通うことになった児童生徒もいます。児童生徒の背景に配慮し、気持ちに寄り添った対応が必要です。	幼い弟妹などの家族の世話をすることが当然とされている文化もあるため「ヤングケアラー」となっていることもあります。いずれの場合も、日常の様子を丁寧に観察し、支援を行います。	ダブルリミテッドとは、二つの言語を使用できる環境にいながら、どちらの言語も十分に獲得できていない状態を指します。家庭内で母語を使用することが多いため、来日後も母国語を第一言語として意図的に習得させる支援も必要です。
習慣・宗教	**食　事**	**身なり**
外国における社会的・宗教的な習慣は多種多様です。 普段は行わない配慮・対応が必要になることがあります。保護者の宗教的な判断を尊重すべきことが望ましいため、受入れ初期に共通理解を図り、可能な限り対応できるとよいです。	給食、修学旅行などにおける食事、調理実習、文化祭などで食事の場面がある教育活動を行う際には、十分な配慮が必要です。 その際、食品そのものだけでなく、その食べ物が触れた食器や調理器具についても忌避することがあるので配慮が必要です。	・ピアスやペンダントの着用 ・男性の髭（成人は髭を生やすという文化による。） ・服装指導（宗教上肌を隠さねばならないという文化による。） ・頭髪指導（頭部に他人が触ることを禁忌または忌避するという文化による。） などに配慮や共通理解が必要です。

コラム ～休日が登校日？～

休日の行事の場合、欠席する外国人児童生徒が多くなります。休日は教会に行く日、家族と過ごす大切な日、親類を訪ねる日など、それぞれの文化や習慣から土日や休日に対する意識に違いがあります。「なんで休日に？」と言うのが本音ではないでしょうか。また、自国では、土日に開催される行事は、自由参加だという国もあるようです。

外国人児童生徒等の多様性への対応

4 外国人児童生徒等が直面する課題

文科省手引 p.8 に該当

Q4 外国人児童が直面する課題と支援には、どのようなものがありますか。

A4 日本の学校生活や社会生活への適応の難しさ、言葉習得の壁だけでなく、自己存在感や自己肯定感の低下等、多くの問題があります。

〇以下の課題に対しては、「支援の具体」を参考に、適切に支援しましょう。

(1)学校への適応、居場所の確保 ⇨ 第4章をご覧ください。

直面する課題	支援の具体
急な編入、転入等で突然異文化に飛び込むことになり、学校生活がストレスの原因となってしまう。 言葉や、文化や習慣の違いなどから、学校生活や友人関係における適応に困難が見られることがある。	教室が安心できる居場所になるような学級づくりを軸とし、級友との良好な人間関係づくりの支援が必要です。 心の居場所をつくるために、学級担任だけでなく、日本語指導担当教師や養護教諭、管理職等、多くの教員で関わりをもつことが大切です。

(2)コミュニケーションの必要性 ⇨ 第3・4章をご覧ください。

直面する課題	支援の具体
言葉や文化の壁により、周りの人とのコミュニケーションが思うようにとれない。	学校生活に最低限必要な日本語(サバイバル日本語)は、取り出し指導等で集中的に指導・学習し、習得を図りましょう。 また、級友との良好な人間関係を通して、言語や文化の壁にとらわれないコミュニケーションを図れる学級の雰囲気づくりも大切です。

(3)学習するための言語能力の習得・学力の向上 ⇨ 第3章をご覧ください。

直面する課題	支援の具体
学校生活で必要な日本語は身に付いてきたが、授業において、日本語を用いての表現・理解が思うようにできない。	転入したばかりの児童生徒にとって、日本語習得は当然必要ですが、生活言語(日常会話)ができるようになることにより、「日本語での学習理解も可能」となったわけではありません。よって、生活言語の習得に継続または平行し、学習言語の習得を進めることも必要です。

(4)かけがえのない自分をつくりあげていくこと ⇨ 第3章をご覧ください。

直面する課題	支援の具体
学校生活において言葉の壁等の問題から自信がもてず、主体性や自己肯定感が欠如している。	特別活動において、学級の役割を果たすことや、学級の一員としての自己有用感をもたせる指導を心がけましょう。 自分のよさや強みを知り、ライフプランを描けるようなキャリア教育を推進することも大切です。

外国人児童生徒等の多様性への対応

5 学校全体児童生徒の指導

(2) 学校の受入れ体制づくり

文科省手引 p.10 に該当

Q5 散在地域において、急な編入、転入による外国人児童生徒を受け入れる際に、学校が直面する課題と支援にはどのようなものがありますか。

A5 学校・日本語指導教室・学級の３つの視点で、目指す支援・体制を明らかにしましょう。

○以下の課題に対しては、「支援の具体」を参考に、校内指導体制を整えましょう。

【学校の受入れ体制】 ⇨ 第2章をご覧ください。

直面する課題	支援の具体
特別な支援が必要な児童生徒に対して、学校全体で支援するための体制が明確でない。	学級担任や日本語指導担当教員に負担が偏ることなく、チーム学校としてどの子も安心して学び生活できる環境を整えましょう。また、保護者や児童との信頼関係を築くために温かい面接を工夫するなど、全職員で外国人児童生徒等教育に取り組む体制を構築することも大切です。

【日本語指導の体制】 ⇨ 第3章をご覧ください。

直面する課題	支援の具体
日本語指導が必要な児童生徒に対して、誰が、何を、どのように指導すればよいか、具体的な見通しをもつことが難しい。	日本語初期指導に始まり、教科学習につながる日本語学習の見通しをもつとともに、文化や背景を尊重し、安心して学べる環境を整えていきましょう。学級担任や通訳支援員等とも連携しながら個別の指導計画を作成し、個に応じた日本語指導を目指します。

【学級の受入れ体制】 ⇨ 第4章をご覧ください。

直面する課題	支援の具体
所属する学級（在籍学級）で安心して学び、生活できる環境を作るために、具体的にどのような支援が有効なのかが明確でない。	日本人児童生徒も含めた学級全体に対する異文化理解、多文化共生の視点を大切にした温かい雰囲気づくりに努めましょう。また、多様な価値観や文化への新たな気付きを通して、言語や文化の違いに左右されない支持的風土の醸成を目指します。

コラム ～温かい雰囲気が児童の笑顔につながる～

ほとんど日本語が話せない児童が編入してきた時の話です。言葉も全く分からず児童の表情はとても不安そうでした。在籍学級に入った時、担任の先生が、地図アプリで児童の国の場所を見せ、食べ物や文化について紹介し、「ベトナム語が話せるなんてすごいね。教えてほしいな。」と話をしてくださいました。その時、初めてうれしそうな笑顔を見ることができ、心温まる瞬間でした。外国人児童生徒を受入れることをプラスに捉え、まずは教師が歓待の心をもつことが、児童の笑顔につながると感じました。